

豊かな友人関係をつくる学校

## 異年齢のかかわりを育む

——ピア・サポート

神奈川県横浜市立西富岡小学校教諭

野川<sup>がわともこ</sup>智子

異学年交流「なかよし活動」導入の経過  
本校が異学年交流の場として「なかよし活動」を導入したのは、二〇〇一年のことである。「なかよし活動」

とは、一年生から六年生までの六、七人ずつの子どもたちで編成する「なかよし級」で行う、全校たてわり活動である。「なかよし級」はさらに四つの小グループに分かれ、六年生はそのリーダーになるとともに、学期に一度の集会と交歓給食の計画・運営を任せられる。

本校の子どもたちは、素直で明るく、家族思いである。しかし、自分の感情の処理がうまくできない、周囲が気になって自分を出さないなど、気になる点もある。

### 六年生を育てるために

各等級担任は自分の教室に待機し、そこに集まって活動する「なかよし級」の児童を担当する。各教師が同じ

視点で児童に関わり、とくに六年生に対して適切なかたちで支援ができるように、次のような共通理解を図った。

計画のときは、六年生の計画を尊重し、十分に考えを聞く姿勢をもつ。また、活動中は、下級生の前で六年生を叱らず、助言するときは近くに行ったり呼んだりして伝える。そして、活動の終わりには、下級生の感想を六年生に伝える。要するに、「なかよし活動」は六年生を育てるためのものである点を教師に自覚させたのである。

### 初めての「なかよし活動」

「なかよし活動」の第一回目は、二〇〇一年の六月に行われた「なかよし集会」だった。

六年生は、六年担任のもとで「どんな会にするか」を熱心に話し合い、計画を立てた。六年担任は、子どもたちが気づかない点を質問し、「なかよし級」のイメージをもたせるように努めた。その後、「なかよし級」の担当の先生に計画を報告し、さらに見直し修正するという手順で準備を整えた。

いよいよ当日。全校の子どもたちははりきって「なか

よし級」へ出かけた。私の教室の廊下では、集まった下級生たちが、初めての教室に入っているのかどうか、少し不安気なのぞき込んでいる。六年生は笑顔で接するが、下級生は緊張気味である。それでもリーダーを中心に会は進み、あっという間に一時間が終わった。

その日のうちに、六年生は「ふりかえり」をする。◎グループでうまくいったこと・うれしかったこと

- ・説明や司会が、みんなに聞こえる声でできた
- ・「楽しかった」「みんなできてよかった」という声を聞いた

- ・手作りメダルを、一年生がすごく喜んでくれた
- ◎次回に気をつけたいこと

- ・みんなが楽しめるゲームや、声を出して盛り上がるゲームを工夫したい
- ・話を聞いていない子やルールを守らない子にちゃんと注意にいきたい

- ・一、二、三年生の近くにしているようにする

ここからもわかるように、六年生は自分たちで進めた活動に手応えを感じ、下級生の喜びを自分の喜びとし、次回の「なかよし活動」への意欲を高めていた。

## 「なかよし給食」

「なかよし活動」の二回目は、七月に行われた「なかよし給食」だった。

六年生の課題は二つあった。一つは、給食当番をどの学年がするか、である。私の担当した「なかよし級」では、一年生から六年生まで全員が一緒に運び、配膳していた。下級生を気遣い、声をかけたり手伝ったりする姿が自然に生まれ、微笑ましかった。

二つ目は、「なかよし級」の中では四つのグループに分かれて会食するので、六年生一人ひとりが各グループでリーダーとしての役割を果たせるか、である。話すのが得意という子どもばかりではないが、「なかよし級をリードするのは僕たちだ」と自負する思いは強い。そこで、自分から話しかけられるように話題をいくつか用意するよう、六年担任は六年生に助言した。

## ◎下級生の感想

- ・ いろんな人がいて、たのしかったよ。六年生はやさしかったのでうれしかったです。(二年)
- ・ いつもとちがう人と食べられてよかったです。いつもより百ばいおいしかったです。六年生のおにいさ

んおねえさん、ありがとう。(三年)

- ・ 一年生や二年生と遊ぶことはあまりないから、すごく楽しかった。これからも話したり遊んだりして気軽に声をかけられる友だちになりたいです。(五年)

## ◎六年生のふりかえり

- ・ 最初はすごく静かだったけど四・五年生が自分からしゃべってくれたのでよかったです。二年生に「あだ名で呼んで」と言ったら呼んでくれてうれしかった。
- ・ グループの人の名前を全員覚えられてよかったです。おもしろい話ができうれしかったです。低学年から高学年までみんなで片づけができたのもよかったです。みんなも名前を覚えられるように名札を作りたい。

これらの感想やふりかえりから、「なかよし活動」は子どもたちの人間関係を広げ、豊かにしていくことができる活動である、との思いを強くした。そして、すべてが初めての活動なのに、怯むことなく全校のみんなが喜ぶようにと前向きに取り組む六年生に、私は大きな希望を抱いた。

## 六年生の気持ちを支えたトレーニング

六年生は、昨年度(五年生時)の三学期に「日本のピ

ア・サポート・プログラム」で言う「領域1」にあたる「ピア・サポート・トレーニング」を体験している。六年生が卒業の準備に入るころから、学校内のいろいろなことが五年生へと引き継がれるが、高学年といってもやはり六年生を頼りにしてきた五年生には、漠然とした不安があった。そこで、「自分をのばし、自信をもって六年生になる方法があるからやってみないか」と子どもたち

に投げかけ、トレーニングを始めた。

私たちは、このトレーニングだけで子どもを変えようとは考えていなかった。しかし、六年生になってからの「なかよし活動」に取り組む前に、互いの関わりあいに対する「気づき」はもってくれたら、と願っていた。

毎日ともに生活してはいても、話しかけたり遊んだり

する相手は、そう多いものではない。けんかをしないから「仲がいい」とか「友だちだ」と思いこんでいるが、その人のことを知っているかと言えば、意外と知らないことが多いものである。この五年生も実態はそうであった。

学級では、トレーニングの回を重ねるごとにお互いの距離が縮まってきた。また、この段階でも「ふりかえり」を大切にしていた。子どもの発達や経験の違いによって「気づき」には幅があるが、この時期に自分を見つめることは大きな意味がある。各自の「気づき」を共有させたいと考え、印刷して子どもに渡した。友だちの「気づき」を読み、「同じ気持ちを感じた人がいる」「あの人はこんなふうに思ったんだ」と共感したり、友だちを認め

たりするようになっていった。周囲を気にして自分を表現することをためらっていた気持ちに変化をもたらし、人間関係の広がりを見せ始めた。

◎トレーニングを終えて・まとめの「ふりかえり」

・今まで知らなかったことや知っていたけどあまり得意なところが少しずつだけどできるようになった気がする。人の話をよく聞いて、人の気持ちを考えることができるようになったと思う。自分のあまり仲良くない友達とも少しわかり合えたような気がする。自分がちょっぴり成長したと思う。六年生になつたらこのことを活かして行動したい。

このような「気づき」と友だちへの信頼が、六年生になった子どもたちの意欲の源になったものと思われる。

### 六年生と下級生のかかわり

「なかよし活動」が回を重ねるにつれ、次第に六年生への求心力が高まっていった。初めのうちは、「つまらない」と言う下級生もいたので、子どもたちを「なかよし活動」に送り出すときの学級担任の言葉かけを見直した。「わからないことは、六年生に聞いてね」「六年生が楽しい会をしてくれますよ」と、六年生に焦点を当てる

ようにした。すると、六年生をリーダーとして認め、六年生が話すとき誰もが六年生を見つめるようになってきた。

六年生が何よりも喜んだのは、下級生からの手紙であった。教室にきた下級生から「ゲームが楽しかったよ。六年生ありがとう」と伝えられるとき、六年生は「自己有用感」を実感する。十二月には五年生からも感謝や憧れの気持ちを込めたカードが届いた。こうした下級生からの信頼が、六年生の自信を強めていった。

また、「なかよし活動」以外でも、休み時間に「なかよし級」の子を誘ったり、「なかよし級」のお兄さんお姉さんに会いに六年生の教室に來たり、小さい子に廊下を譲ったり、そんな姿も見られるようになった。

そして、二月、五年生が「ピア・サポート・トレーニング」を体験し、六年生からバトンを受けるときがやってきた。すると、六年生から「五年生に伝えておきたいことがある」との声があがり、五年生からも「六年生と会食したい」との申し出があり、時間を設けた。六年生は「なかよし活動」のリーダーとして学んだことを自信をもって五年生に伝えた。五年生から「六年生のように下級生をリードします」との言葉を受け、いっそう「自

己有用感」を強くするひとときとなった。

三月には、五年生の企画・運営で「なかよしお別れ給食」を開いた。五年生は、六年生のためにプログラムを工夫し、下級生をまとめ懸命に活動している。それを心配そうに見守る六年生の姿は、下級生への思いやりに満ちていた。四年生以下の子どもたちからも感謝の手紙やプレゼントをもらって、六年生は最高の笑顔で教室に帰ってきた。一年間の活動の成果だった。教職員の共通理解と、トレーニングを活動に活かした最上級生の意欲により、学年を越えた人間関係が少しずつ広がっている。今年、委員会の役を決めるとき、「卒業した六年生みたいに人の役に立つことをしたいので立候補します」と言った五年生もいた。下級生は、確かに六年生を見ていたのである。六年生が下級生の手本となり、ともに人間関係を広げながら育ち合っていくことを期待し、今年度は二年目の「なかよし活動」を進めている。

〔参考文献〕

- (1) 滝充(編)『ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編』金子書房、二〇〇二
- (2) 滝充(編)『ピア・サポートではじめる学校づくり 小學校編』金子書房、二〇〇一